

成城町と多摩プラーザ地区の比較研究

鈴木君代

この論文は、成城町（東京都世田谷区）と多摩プラーザ地区（横浜市緑区美しが丘）という2つの高級住宅地をいろいろな面から比較してみたもので、その構成は第1章 自然環境、第2章 発展過程、第3章 土地利用と道路網、第4章 住宅地となっている。

実際の比較にあたっては様々な資料のほか、第3章の土地利用と第4章の住宅地については実地調査を行ないその結果を利用した。3章までを概括してみると次のようになる。

成城町はほぼ平坦な台地上に立地し、関東大震災後に成城学園が移転してきたのに伴って計画的に開発された町である。学園が町づくりを手がけたのは移転費用などの調達のためであり、土地を買った人々には学園後援者など比較的裕福な者が多く、その後町が高級住宅地として発展する一因ともなっている。成城町では道路網は基盤目状に整えられ、整然と住宅地が広がっている。医療施設なども多く、駅付近には典型的な駅前商店街が形成されている。

一方、多摩プラーザ地区は多摩丘陵の一部にあって、複雑な地形をしている。ここは東急多摩田園都市の中の1つの町として、東急によって昭和40年ごろから開発され、非常に計画的に町づくりが行なわれている。ここでは車道と歩道を完全に分離した独特の形態の道路網がとり入れられ、土地利用は機能別にはっきりと区分されている。

第4章では住宅地だけをとり上げ、特に個人住宅についてはその外観を詳しく調査して比較を行ったので、以下ではその結果を簡単にまとめておくことにする。

- 階数………共に2階建てが最も多い。
- 屋根………材料は成城町ではかわらが過半数を占めているが、多摩プラーザ地区ではかわら以外のものも多く、後者の方が色あいもカラフルで技術的・デザインの新しいものが目立つ。
- 外壁………成城町ではモルタル造りと木造が約40%ずつを占めるに対し、多摩プラーザ地区ではそれほど片よった傾向は見られず、コンクリート造りやプレハブ住宅などもかなり見られる。
- 窓わく………木製とアルミサッシに分けて調べたが、結果は新旧の差を明瞭にあらわし、成城町では木製が全体の73%であるのに対し、多摩プラーザ地区では逆にアルミサッシ

が全体の80%を占めている。

- 玄関……共にドアが非常に多く、成城町では古い家の多い割にドアが多い。
- 車入れ……これは単に有無を調べただけであるが、共に70%以上の住宅にあり、現在の住宅地としては非常に高い数字と思われる。
- 塀、垣……塀や垣の種類は様々であるが、共に大谷石の使用が目立ち、また成城町では生け垣など緑が大変豊かである。

河北潟周辺における農業

千 秋 俊 枝

季節風の影響が強く、冬は雪の中に閉じこめられる北陸では、春は雪どけ水が得られ、夏は高温多湿であるという気候的条件が、従来から水稲単作中心の農業を進展させ、又冬の農閑期に他の産業に従事する農家の兼業化を進めていた。水田率は80%以上と高く、多額の費用を投入して高収量をあげる集約経営で、早生種の栽培が多い。北陸の中でも石川県は、平均経営規模は新潟県に比べて小さく、藩政以来の伝統を基盤に繊維、機械を中心に、農村内にも地場産業がよく発達し、金沢市の存在もあって、兼業化が最もよく進み、95%で、種類も恒常的な雇われ兼業が多い。

金沢市の北に接する河北潟は現在はその3分の2が干拓により陸化されたが、その東の湖岸平野は非常に低湿で、かつてはしばしば水害を被ったが、現在は改良されている。ここは農業の占める比重の高い農業地帯であるが、昭和25～35年にかけては、石川県平均に比べて兼業化は進んでおらず、むしろ新潟県に近い。35～40年にかけて急激に兼業化が進み、45年には専業農家の比率は2.7%になってしまった。兼業の深化の程度は新潟県と石川県の間あたりに位置し、農業に対する意欲の点では石川県の中ではそれ程低くはなく、農業をある程度の水準に維持しながらの「総兼業化」をしている。

河北潟東岸平野上の森・川尻・大場の3集落を比較すると、経営耕地規模の大小がそのまま兼業化の進み具合と結びつき、中でも金沢に最も近く、生活も都市的性格を強く帯びてきている大場は、第2種兼業が54.7%（45年）を占める。経営耕地規模が最も大きく、金沢から一番離れている森は、最も農業を主体とする傾向が強く、第一種兼業が75%で、農業をある程度の水準に維持し